

FD 通信 No. 4

飯田女子短期大学 教務委員会

<http://www.iidawjc.ac.jp>

FD の本質を見直すーシラバスの見直し、カリキュラムマップの作成を通してー

教務委員長 松崎行代

FD 委員会が立ち上がり徐々にその活動を充実させていくなかで、教育活動の質の向上・改善は、単なる授業における教育方法や指導技術の改善・向上を目指した取り組みだけではないということが明確になってきました。一人の学生の育ちという視点から本学の教育を捉えることが必要であること、そのためには、教育目標の見直し、そして、その目標を頂点とした各科目のシラバスの見直しこそが、FD の必須事として挙げられたのは、昨年度の FD 委員会でのことでした。

今年度、学内の事情により教務委員会と FD 委員会が一体化されましたが、これは、大変効率よく教育改善への取り組みが進める要因となったと思います。

委員会のリードのなかで、各学科・専攻会で、あらためて教育目標を整理し、各科目の授業目標と学科の教育目標との関連を表にまとめました。さらに、各科目のシラバスを見直すことで、教員は、一人の学生が卒業までに学ぶ全科目の内容を把握しました。その際、授業内容のダブリや逆に扱いの薄い内容の調整をしたり、科目間の横の関係、縦のつながりから開設時期の妥当性を吟味しました。こうした作業によって、カリキュラムマップが作成されたのです。

カリキュラムマップは、学生自身が、自分の卒業までの学びの道筋を知り、より主体的に学修の歩みを進めていくために必要なものですが、教員にとっても、自分の受け持つ科目の位置付けが明確に意識され、また、学科を中心とした教員のチームで一人の学生を育てている、そんな一体感・協働を形成できるものなのだとわかりました。この教員の協働への意識化は、本学の教育力向上の基盤を厚く強固なものにしたと思います。

FD は、教育力向上の“組織的”な取り組みと定義されていますが、本学がこれまで行ってきた FD が、本当の意味での“組織的”な取り組みになっていたか、今年度大いに反省し課題が見つかったように思います。全員が研修会に参加する、アンケートを実施することが、組織的な取り組みではありません。教員同士のつながりのなかで教育全体が総合的に質の向上をみる、そのような取り組みが“組織的”なのだと考えます。

来年度、本学は認証評価を受けることになっています。今年、一気に教育改善が進んだ一つの要因は、この認証評価が目の前に置かれたからであることは、事実だと感じています。PDCA サイクルも確立しつつあり、自己点検の視点が定まったことにより、今後は、より主体的に常に改善と向上を目指した教育改善：FD の取り組みを進めていきたいと考えています。

目 次

「FD の本質を見直すーシラバスの見直し、カリキュラムマップの作成を通してー

教務委員長

松崎行代

<報告 1> FD 研修会

<報告 2> FD 講演会

「FD と SD の連携」

SD 委員長

塩沢千文

「認証評価に向けて～学習成果と FD 活動～」

ALO

近藤民恵

<報告1>

FD研修会

—授業の行い方と観方を提案します—

講師：飯田女子短期大学 家政学科准教授 奥井現理 先生

3月5日(火)10時から、FD研修会が開催されました。学習成果を明確に示すことが学内外から期待され、また、来年度からの授業公開を控え、授業方法について改めて学ぶ機会をもちたいということでこの研修会が計画されました。

奥井先生は、「授業の技術はひとりぼっちの修行です」という言葉から始められ、主に予備校で授業をされた経験から得たことをお話ししてくださいました。



1. 「どうすれば授業がうまくなるのか」と考えるとき、「これさえあれば」というアイテムについ頼りたくなってしまいが、「これさえあれば」などいうものは実は存在しない。本質である“骨”がなければ、どんなアイテムも使いこなすことができないだろう。

2. では、授業の本質とはなにか？

①授業の本質1：授業内容の本質を衝いている端的な“発問”、発問の答えに辿り着くことができるような明確な“指示”が「うまい授業」につながる。＜発問→指示→活動→評価＞を繰り返し行うことで授業が成立している。

②授業の本質2：板書は、リアルタイムの思考を共有するためのツールであり、そこには共感がある。教員は、板書から逃げてはいけぬ。

③授業の本質3：教員は、授業をしながら学生の様子を観て、常に授業を評価し、指導を組み立て直して進めている。この限りにおいて、「一方的な授業」とは言えない。

④授業の本質4：何度もチャンスが与えられるような活動や、点数を知ることで向上が臨めるような活動の場合は、おそれず評価を伝える方がよい。

3. 授業の本質でないものはなにか？

①授業の本質でないもの1：その授業内容がグループワーク（アイテム）を必要としていないのに、「グループワーク」を無条件に用いてはいけぬ。

②授業の本質でないもの2：「感動」は副産物であり、授業目標の達成こそが本質である。

③授業の本質でないもの3：評価方法は、授業内容によって異なり、授業内容に合った方法を工夫すべきである。「ポートフォリオ評価」が絶対ではない。

研修会に参加した教職員は、身近で切実な内容に熱心に耳を傾けていました。新年度の各自の授業への何らかの形で反映が期待されるそうです。（文責：岩崎みすず）



<FD 研修会の感想>

FD 研修会の学びを生かす

家政学科 柴本むつ美

「どうすれば授業が上手くなるのか？それは虚しい問いである。授業が上手くなる義務はない」という言葉に一瞬甘えて安心したが、授業改善に向けた努力は惜しんではいけないと改めて感じる場となりました。また自分の授業に対する不安要素が少し解消された研修会でもありました。具体的に2点挙げさせていただきます。

1点目は、「一方的な授業」に対する認識が変わったことです。特に講義科目において一方的な授業になっているのではないかと不安を感じていましたが、講義中は常に学生の理解や様子を把握しながら授業を進行しているのだから決して一方的な授業ではないという見解を聴けて良かったです。

2点目は、「板書」についてふれて頂けたことです。特に板書が多くなる講義内容の時は板書するよりスライドに示した方が授業時間を有効に使えるのではないかと感じることもありました。しかし、板書は「リアルタイムの思考を共有するためのツールであり、共感がある。さらに何か板書したら間をとることで追思考ができる」という板書のもつ意義、可能性を確認できたことは自分にとってプラスになりました。

何を教え、どのような授業をしていけばよいのか悩むことは尽きないですが、このような研修会を通した学びをしっかりと授業に生かしていきたいと思います。

FD 研修会 奥井先生からの学び

幼児教育学科 齊藤勇紀

短大の教壇に立って一年が経ちました。講義に関しては、一回の授業を立案することに奔走し、私自身も「面白さにかける」と感じたことがありました。学生にとってもさぞかし、退屈な時間であったのではないかと思います。学生からのアンケートを頼りにアクティブラーニングを取り入れたり、体験談を取り入れたり、試行錯誤しながら授業を計画立案した一年目でした。

本研修会では、奥井先生より授業の本質についてご講義いただきました。FD 初学者の私にとっては大変参考になるご提案をいただきました。「発問」により授業を組み立てる、「発問と指示の繰り返し」によって授業を成功に導く、知識を詰め込むだけでは、積極的な思考は生まれてこないものだと考える良い機会となりました。

自らの授業は学生たちが現場で役立つ知識・技術として獲得していくものなのか、保育者を志す学生への教授をどのようにすすめていけばよいのか、二年目もこうした大きな命題に立ち向かっていくことになります。研修会で得た知見をいかし、学生が、特定の情報に興味を持ち、主体的に思考し、応用していく、このようなプロセスが広がっていくように、学生達の反応を一つ一つ確認しながら柔軟な発想を持って実践していこうと考えます。奥井先生貴重なご講演をありがとうございました。

高等教育の授業展開を考える上で

看護学科 北林ちなみ

学校で行われる授業においては、全過程を見据えた長期目標と1コマ1コマにおける短期目標を設定し、何を学べるようにするかを教員自身が明確にしておくことが重要となる。特に専門職者を育てる授業においては講義を行いながらその目的が達成できているのかを評価し、達成できないと考えられる場合は、速やかに授業中に修正を行わないとその後の授業に影響が現れてくる。今回の研修会にて授業の行い方の講義を聞き、よりその必要性が確かなものとなった。また、授業の本質と本質でないものを教員が理解し、対象の学生に適した内容にしていけないと、授業の理解度が高まらないことが考えられた。授業中に学生の様子を十分に観察し、理解度を把握することができていれば一方的な授業ではないということを聞き、講義中心の授業になってしまい学生とコミュニケーションをいかにして取ればいいのかと考えていたことが多少解消された感がある。その場合、非言語的なコミュニケーションとして読み取る感性が必要となる。この研修会に参加して、今まで行っていた授業を振り返る良い機会となり、今後の授業展開を考える上で参考になる研修会であった。

<報告 2>

FD講演会

「大垣女子短期大学における教育改善の取組」

大垣女子短期大学 総合教育研究センター長 矢田貝真一 先生

3月5日、大垣女子短期大学総合教育研究センター長 矢田貝真一先生を招いて「教育改善の取組」などについての講演会を開催しました。大垣女子短期大学は、修業年限が3年の幼児教育科、歯科衛生士科と2年の音楽総合科とデザイン美術科の4学科からなる総合女子短期大学で、創立44年になります。平成25年4月より、看護学科を開設します。

矢田貝先生は、「短期大学を取り巻く動向」「高等教育の大衆化と教える技能」「教育の質保証に向けて」「学びの質向上に向けて」「地域と短期大学」などについて講演されました。

1 教育の質保証に向けて

大垣女子短期大学では「教育目標実現のための教職員の職能開発と教育改善活動」としてFDを位置付けている。平成19年には大垣市と連携協定を結び、「地域の子育て施策を活用した教育方法の改善」に取り組んでおり、その後、教育GPにも採択された。

平成22年度より、教育で身につく短期大学士力と、教育の質保証の手だてを明確にすることを目的として「見える化」プロジェクトに取り組んでいる。取組みは、学科長が中心となり、FD専門部会員が補助し、全学科が実施している。全学では自己点検・評価委員会が中心となり、ALOの調整のもとで推進している。詳細な日程と、具体的な進め方を参考例とともに示すようにしている。これまでの成果として、「建学の精神から授業までの体系的な目標の明示」「学習成果を把握するしくみを定め、科目ごとの具体的観点の基準を作成」などが挙げられる。

2 学びの質向上に向けて

現在「見える化」プロジェクトⅡとして、学生に教育課程における授業でつける力と科目の体系（カリキュラムマップやカリキュラムツリー）を明示し、教育の構造化を目指している。今後は「学ぶ目標と修得の段階（評価）を明らかにする」「学びの手だてを身につける」「学びによって達成感をもたせる」などを「見える化」プロジェクトⅢとして、実施する予定である。

3 短期大学の将来

- ・教育には、どのような人間を育てるのか確固とした目標と信念が必要である。
- ・短期大学には、4年制大学や専門学校では果たせない役割がある。
- ・これからの社会にあっても、それを支えるにふさわしい女性教育は必要。

（しっかりと・ほどほどに、確実に・少しずつ、嫌わずに・入れ込まずに、たゆまず・あせらずFD活動）

（文責：友竹浩之）



<FD 講演会の感想>

矢田貝先生のお話をお聞きして

家政学科 安富和子

飯田女子短大に来て二年目の私は、FD についての理解は浅く、矢田貝先生のお話をお聞きし、FD のとらえ方や考え方、今後の方針について理解を深めることができたように思います。

文科省の指導の変遷は、平成 3 年の大学教育の規制緩和から平成 11 年に FD の努力義務化がされ、平成 12 年には自己点検評価と結果公開・認証評価が義務化、平成 21 年には FD の義務化がされてきました。

大垣女子短大は、平成 12 年から FD についての取り組みを始め、授業改善として公開授業の実施、授業のビデオ撮影による振り返りをおこない、授業交流会では公開授業の「見る観点」を決め検討会を実施してきたようです。更に平成 16 年には F D 推進プロジェクトを立ち上げ、FD を総合的にとらえ直し、「見える化」による教育の構造化を図り、教育目標実現のために、14 のプロジェクトを行ってきたようです。その中で、「授業評価の内容」については、学生自身の学習態度等の自己評価と、授業に対する評価の二つの内容を実施しており意義あることだと思いました。授業は教員と学生が一緒に作り上げていくものでもあり、お互いに自己を振り返り改善していくことが大切だと思いました。

平成 24 年に文科省は、FD とは授業のやり方と技術改善だけでなく、教育改革全体としてとらえ、教員は授業づくりを学ぶためには、学生の学ぶ雰囲気を作ること、そのためには学生をきちんととらえていくことが大事であると指導をしています。最後の教育機関としての女子短大の役割を、建学の精神に則り自分のできることを前向きに考え、みんなで連携していくことが必要のようです。

最後に矢田貝先生は FD について、しっかりとしかし入れ込まず、たゆまず、あせらず、少しずつやってくることが大切だとおっしゃいました。本学の独自性を持ってゆったりとやっていけばよいと感じました。ありがとうございました。

「見える化」プロジェクトから見えてきたこと

幼児教育学科 宮下幸子

ここ何年かの本学の FD の取り組みの中で感じていた、「授業の見直し」、「授業の改善活動」だけでよいのか、という疑問に明確なお答えを頂いた講演であった。授業を提供する側の反省と、それを与えられる側の感想だけの議論では、知識の受け渡しの方法論とそれに関ってくる相互の人間関係や人間性が前面に押し出されるだけで、本質となる建学の精神に則って教育が行われているか、というレベルまで深めていくことは望めなかったのではないと思われる。

「見える化」プロジェクトに示された具体案は、目標や目的の共通理解が容易にできる様体系化され、チェック項目も教員の一方的な評定基準値から、学生の優劣をつけて理解力や能力を問うのではなく、学生の到達度は即ち授業の質の評価となり、そこから教員は反省し改善してゆく道筋を示すものとなっている。

大垣女子短期大学でも教員の理解を得ることに苦労されているようであるが、教員の意識が高まらない限り表面的な取り組みでしかないことは否めない。

FD 講演会に参加して

看護学科 吉田恵理

本学と似た学科構成をもつ大垣女子短期大学矢田貝真一先生のお話を聞くことができました。

大垣女子短期大学の『見える化』による教育の構造化の取り組みをお聞きし、教員が建学の精神から授業までの構造を構築し、大垣女子短期大学における教育の全体像がつかめるようになってきていると感じました。これは総合教育センターの矢田貝先生はもちろん、学長のリーダーシップの基、全教員の協力があることでです。協力を得るまでの矢田貝先生の努力は並々ならないものと思われ、頭が下がる思いです。今後学生へ教育の構造化をどのように周知なさっていくのか、またそのお話をお伺いできたら嬉しく思います。

本学においても来年度は認証評価を受ける年であり、大変参考になる、そして刺激を受けた講演会でした。中でも講演の最後にそっとおっしゃっていた「しっかりと・ほどほどに、確実に・少しずつ、嫌わずに・入れ込まず、たゆまず・あせらず FD 活動」ということばが一番身にしました。本学の FD 活動がこのように行われるよう協力していきたいと思います。

SD 委員会では3つのことをしてきました。ひとつは、「信頼される事務局」「育む心で学生支援」を掲げ、部署ごとの目標と各人の目標を持って業務に取り組み、半期ごとに自己評価をすることです。もうひとつは、研修計画を作り、本学について知ること、大学について知ること、設置基準などの法規を知ること、あるいは、職員としてのマナー講習やパソコンの操作技術講習会などの勉強会をしたことです。そして最後に、事務局と施設について「学生満足度アンケート」を実施し、学生から評価を得ることと、学生の声をひろうことをしてきました。これらは前委員長からの継続で4年目を迎えようとしており、ささやかですが、飯田女子短期大学事務局の取り組みのPDCAサイクルが構築されようとしていると感じています。この「学生満足度アンケート」の結果については、毎回学内集談会で発表する機会をいただいております。アンケート結果を学内で共有する仕組みができました。また、この結果をもとにして駐車場の整備、講義室の修繕をするなど、庶務課が早速に目に見える回答をしたことからかもしれませんが、アンケートの自由記述欄には、事務局が当初考えていなかったさまざまなことが記載されるようになってきていると感じます。

ところで、認証評価では職員にも学習成果への「認識」「貢献」「把握」が求められています。3月には自己点検委員会から、評価項目基準Ⅱ教育課程と学生支援B-3の改善への取り組みとして「SDアンケートに“学習成果の獲得に対する生活支援”の視点を入れる」という課題をいただきました。具体的にどのようなことなのでしょう。今年度はこれらを課題として考えながら、本学のAP・DP・CPについて職員の視点からそれぞれの業務の改善課題を見つけることができるなら、FDとSDとの連携のカタチが見えてくるような気がします。

FDは教員の授業改善、SDは職員の職務内容の改善と、一見異なる活動が求められているかのようにみえますが、「本学がどのような短期大学を目指し、どのような教育を目指し、どのような学生を育てることを目指すか、そして、それらをどういう方法によってしようとしているか」と考えると、FDもSDも学生を軸にして、その目指すところは同じと考えられると思います。私は、広報の業務と学生課の業務に少しばかり携わったことから、ことに学生の入口と出口の業務は、教職員がスクラムを組まねばどうにもならないと感じています。今、FSDの研修企画をという声がSD委員会にあるのは、やはり教育を抜きにしては業務がみえてこないと職員の誰もが考えているからだと思います。

認証評価に向けて～学習成果とFD活動～

ALO 近藤民恵

周知のことではあるが、本学は平成25年度に認証評価として短期大学基準協会による第三者評価を受けることが決まっている。短期大学基準協会の示した評価基準の中心となるのが「学習成果の明確化とその査定」である。「学習成果」とは、これまで授業で学ぶべき事柄を“教員が何を教えるか”として示してきたものから、“学習によって学生ができるようになること”を示すことへの転換とされている。さらに、明示された学習成果に対し、授業実施後の達成度を質的及び量的に測定し、そこから次の課題を見つける動きを絶えず作り教育の質の向上を目指すことが求められている。この動きがPDCAサイクルであるが、学習成果におけるPDCAサイクルの動きはFD活動の授業改善と一体のものである。また、カリキュラムマップを作成し、それぞれの科目が学科・専攻の教育課程でどのような位置づけにあるかを明確にしておくことも連動している。カリキュラムマップの作成過程では教員同士がコミュニケーションをとり、お互いの授業と教育課程への認識を深め、授業改善への動きが活性化されることに大きな意義があると考えます。

学習成果の明示は学生への到達目標の明示に他ならず、2年間の学びにより自分の向かうべき学習の方向を学生自身に自覚させることでもある。学習成果とは数値として示される量的なものと記述等で示される質的なものとで組み合わせ、教育目標や達成目標に対する到達がどの程度得られたかを客観的に判断したものとされているが、学生の成長を客観的に判断することに対する考えの違いももちろんあり、始まったばかりの学習成果の査定に対する取り組みは、本学が本学としての答えを模索している段階である。正しい答えが用意されているものではなく、次へのステップをどう進めるかの試行錯誤とその過程での教員間の連携と対話とが重要だと考えている。平成25年度のFD活動の新たな動きが学習成果の取り組みに反映されるよう、ALOとしての役割を果たしていきたいと思う。

編集後記

FD通信も第4号となり、あらためて既刊の通信を手にとってみるとこれまで多くの先生方に執筆いただけてきたこと、それぞれの思いが交錯する場であることへの認識を持ちました。認証評価に向けた自己点検・評価の動きと合わせFD活動の位置づけもますます重要になってきています。組織的なFD活動の推進を担う通信として、今後もFD通信を発展させていければと思います。
(教務委員 近藤民恵)

飯田女子短期大学FD通信 No.4 (発行日 2013年3月31日) 編集担当 教務委員会

委員長 松崎行代

委員 伊藤洋子 岩崎みすず 及川直樹 小笠原京子 黒岩長造 近藤民恵 庄司洋江 友竹浩之 脇坂幸子

※FD通信へのご意見ご感想をお待ちしております。 fd@iidawjc.ac.jp